

平成 30 年 10 月 9 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380196

研究課題名(和文) 植民地制度と標本：博物誌研究に占める島と植物園・博物館の役割の検討から

研究課題名(英文) Colonial institution and specimen: examination of the role of islands, botanical gardens and museums in natural history

研究代表者

尾立 要子 (ORYU, Yoko)

神戸大学・大学教育推進機構・講師

研究者番号：30401433

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：欧州の博物館等の所蔵する旧植民地(特に島嶼)の莫大な蒐集品を形成した「島を徹底的に標本化する」活動を研究対象とした。関連資料とともに、ボローニャ大学およびモンペリエ大学のコレクションを調査した。所蔵品を植民地主義に対する認識を深めるために活用する方法についても検討した。関連して、1990年にニューカレドニアおよびパリで開催された展覧会「翡翠と真珠」(独立派のリーダーで前年に暗殺されたジャン＝マリ－・チバウが関わった企画)を調査した。これは先住民のカナク人の文化を印象づけた画期的な企画であった。欧州の所蔵品による日本での展覧会の可能性も探ったが、諸般の事情により実現には至らなかった。

研究成果の概要(英文)：This research starts from the rich collections of botanical and other specimen from ex-colonies (especially islands) in European museums, built by the activity of "botanize the island thoroughly" (an expression in OED). We have examined the related documents and the museums possessing the collections including Bologna University and Montpellier University. In the context of today's decolonization, we have sought the way of making use of such collections, witness of crude colonialism of the past, to improve people's critical thinking. To this purpose, we have examined the exhibition "De jade et de nacre", held in New Caledonia and Paris in 1990, organized by Jean-Marie Tjibaou (leader of independent parties of the island, assassinated the year before), which had great success in manifesting the culture of the Kanak, native people of the island. We have tried to realize an exhibition of European botanical collections in Japan, which has not been realized because of various circumstances.

研究分野：国際関係論

キーワード：植民地研究 ニューカレドニア アンティル諸島

1. 研究開始当初の背景

研究代表者はフランスと旧植民地の関係再編(脱植民地化)を研究テーマとし、科学研究費補助金による研究課題「周辺からの共和主義:フランス海外領政策にみる共和主義の変容」(2006-2008年度基盤研究C, 研究代表者) 口頭報告(日本平和学会2010年度研究大会、及びヌメア協定10周年マティニオン協定20周年記念講演会(2008年4月25-26日於パリ)) 科学研究費補助金による共同研究「『植民地責任』論からみる脱植民地化の比較歴史学的研究」(2004-2006年度基盤研究(B), 代表者 永原陽子、研究協力者としての活動、「脱植民地化の双方向的歴史過程における『植民地責任』の研究」2007-2010年度基盤研究(A)、代表者 永原陽子、研究分担者としての活動)を行ってきた。

本研究は植民地化の過程とその中でアクターを捉える別の視点を求める探索に端を欲する。

フランスやイタリアのミュージアムは、海外の島嶼に由来するきわめて多くの標本を所蔵している。これらの標本は博物誌研究に大きな役割を果たしたが、その蒐集の背景に植民地主義があったことは明らかである。

それは一言で言えば島嶼を徹底して標本化する(OEDのto botanize the islands thoroughlyという表現を借用した)態度であり、その対象には日本も含まれていた。このような性格を持つ博物誌・植物研究と、その研究を支えた機関(植物園・博物館)が文化に果たした役割と研究に利用した島嶼を、文化移動論として比較・研究を行うことで、これまで注目されていなかった植民地主義の一面を解明することになると考えた。

2. 研究の目的

島嶼に関する博物館の豊富な蒐集標本を、蒐集した本国側と蒐集された島嶼側の両方の視点を意識しつつ蒐集・研究の実態と、対象とされた地域の課題・問題点を明らかにすることが本研究の目的である。蒐集物の所有をめぐる問題の検討を一つの柱とする。植民地時代に蒐集された標本(とりわけ人骨など)の返還が問題となり、ニューカレドニアでは実際に返還された例もある。このような標本に対する評価の変化は、本土と旧植民地の関係再編過程とも関連するものであり、脱植民地化の一つのステップである。(奇しくも本研究開始の頃から日本でも研究機関が保有していたアイヌ人の遺骨が問題となった。)

過去に遡って標本の蒐集の時点で考えれば、標本蒐集は植民地経営によって可能になったと同時に、植民地経営に寄与し、植民地主義を制度的・思想的に支える営為であったことになる。

同時に、すでに存在する膨大な標本を活用

して、島嶼(旧植民地)の歴史や現状に対する理解を深めるエクシビション、あるいはネット上でサイトの構築などの可能性を探る。

3. 研究の方法

文書館および図書館資料の閲覧、博物館等の調査をおこない、また特に博物館を訪問して担当者と協議した。

4. 研究成果

・展覧会「翡翠と真珠」

1990年にニューカレドニアおよびパリで開催された展覧会「翡翠と真珠」(De Jade et de Nacre)は、現地の文化を紹介するものであり、展示されたコレクションから、ある時代のこの島の文化の状態を立ち現れさせることに成功したものである。この展覧会と、その準備過程で大きな役割を果たしたジャン＝マリ・チバウ(独立運動の指導者でもあった)および展覧会の実現の過程について詳細な調査をおこなった。

調査の結果、判明したことの概要は以下のとおりである。実施準備においてフランス国立博物館協会等が作成した実務上の文書は、行政上の記録としてすべてルーブル美術館文書室に保存されていたので、これを閲覧し、種々の困難を克服してこの展覧会が実現したことを確認した(フランスでコレクション出品を拒む博物館があったが、スイスの小さな博物館の協力が得られたことなど)。

またこの展覧会が、以前に中止された展覧会の構想を引き継ぐものであったことを確認した。すなわち、1985年にニューカレドニアでの開催される予定であった「想像のミュージアム」(musée imaginaire)と題するカナク文化紹介のための展覧会が、展示品・資料の輸送もなされた段階で、現地での独立派と反独立派の対立の激化のために中止されたのであった。この中止された「想像のミュージアム」に代わって1990年に「翡翠と真珠」が開催された背景には、1988年に締結されたマティニオン協定があった。これは現地の激しい対立を憂慮した就任直後のロカール首相が独立派と反独立派を招いて調停を行った成果であり、ニューカレドニアの脱植民地化の方向性と具体的なプログラムを示した協定であった。そのプログラムと並行して「翡翠と真珠」が実現した。(しかし、「想像のミュージアム」を含めて70年代から、ニューカレドニアの文化的プログラムを主導し、独立派のリーダーでもあったジャン＝マリ・チバウは1989年に協定を不満とする独立派に暗殺されている。)

なお、この展覧会のカタログの冒頭には、フランス海外県の一つであるマルティニーク選出の国会議員であり世界的な詩人でもあったエメ・セゼールによる、チバウの追悼文が掲載されているが、その原稿も文書の中

に含まれていた。展覧会の実施準備過程の文書がいかに注意を払って保存されていたかが知られる。

全体として展覧会「翡翠と真珠」は、植民地制度の下で蒐集され、各地の民族学博物館および自然史博物館に所蔵されてきたコレクションが先住民の文化の存在を強調し、脱植民地化のプログラムに寄与した重要な事例であることが確認できた。

ニューカレドニアについては、脱植民地化過程として、博物学標本の返還が謳われ（ヌメア協定）、実際に返還が実現している。その一方で、標本研究対象だった蒐集品が、フランスとの関係再編過程に必要な植民地主義時代の蒐集という活動を見せる展覧会の場を構成し、「二国間関係」の相互理解を促した（展覧会『アートは言葉である（L'Art est une parole）』2013年10月15日-2014年1月26日開催）。

・宣教師による蒐集活動

また、実際の植物標本等の蒐集活動はどのように行われたのか、宣教師などによる植物標本収集、本国への送付・蒐集というサイクルが、どのようであったのかも興味深い問題である。植物研究者については、パリ自然史博物館を筆頭に、ヨーロッパの自然史博物館コレクションに見られる通り、標本収集活動が活発に行われた時代があった。日本の標本は、シーボルト来日時の博物誌標本、ペリーが来航した時に膨大な植物標本を持ち帰ったことが知られている。

このような活動について、新たに具体的な知見が得られることを期待して、19世紀末に来日し、奄美地方で宣教活動のかたわら、標本採集を行ったことが知られているフェリエ神父の採集した標本の所在について調査を行った。神父が所属していたパリ外国宣教会に照会したが、残念ながら標本の所在についてまったく手がかりをつかむことはできなかった。しかしパリで容易に入手できないアジアの亜熱帯の植物標本がすべて廃棄されたとは考え難いので、その所在の探求は今後の課題である。

・植物標本の調査と活用の可能性

アルドロヴァンディの植物標本を所蔵する、ポーロニャ大学附属の植物園併設の研究施設、フランスで最古の植物標本コレクションを持つモンペリエ大学を訪問し、標本の現状を調査した。

標本の活用の可能性についても提案をおこなった。残念ながら、植物研究者から積極的な反応は得られなかった。とりわけ標本の貸出についてはきわめて消極的であった。ネット上での仮想的な展覧会の可能性についても検討したが、植物研究者間でも、それで構わないという意見と、オリジナルな標本に

こそ価値があるという意見があり、今後の検討課題とした。

なお、海外のコレクションの日本での展覧会の可能性について、日本の代表的な植物研究者であった牧野富太郎の標本を大量に所蔵する高知県立牧野植物園とも協議したが、担当者の異動によって現実化しなかった。

・無形の標本

蒐集された標本として、中心的な対象としたのは植物標本に代表される、有形の標本であるが、島嶼を標本化するということならば、歌謡や舞踊のような無形の文化も対象になりうる。パリおよびリヨンにおいて海外島のアンティル（マルティニーク島およびグアドループ島）出身者から、島を離れる人への饒（はなむけ）の歌として広く知られる「アデュ・フラール、アデュ・マドラス」（Adieu foulard, adieu madras）の歌詞の解釈について聞き取りを行った。

この歌はラフカディオ・ハーンが来日前にマルティニーク島に滞在していた時期に、この地域の文化として記録しているほどの歴史を持つ（つまり19世紀に標本として採集されている）。「私の愛しい人が去っていく」と別離の辛さを女性が歌い、愛しい人を遠くに連れて行かないようにと総督に懇願するこの歌は長らく愛唱されていた。さらに1950年代にはアンリ・サルパドールが船上の男が歌う歌詞のバージョンを出して爆発的に売れた。

ところが1960年代から、普通の人が出稼ぎや移住でフランス本土に向かう機会が増え、島を離れることによる別離を多くの人を経験するようになると、この歌を嫌う人、この歌をこれらアンティルの島々の植民地的状況を象徴するものとして厳しく批判する人などが増えてきたことが聞き取りによって確認できた。この成果は国際学会で発表した（本報告書の「主な発表論文等」を参照）。

・まとめ

本事業では、1990年-1991年にかけて実施された展覧会『翡翠と真珠（De Jade et de Nacre）』の準備過程を聞き取りと併せて調査し、研究者としては知識と認識を深めることができたことが最も有益であった。今後の研究活動を通して成果を報告したい。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 1 件)

Yoko ORYU "Contemporary elegy of *Adieu Foulard, adieu madras* and French diaspora from the French Oversea Department in the Caribbean" .ISISA (International Small Islands Studies Association) "Islands of the World" conferences, Islands XIII - Penghu Archipelago, Taiwan, 22-27

September 2014.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尾立 要子 (ORYU, Yoko) 神戸大
学・大学教育推進機構・講師

研究者番号：30401433

(2) 研究分担者 なし

(3) 研究協力者 なし